

名古屋

近代の都市づくり

— 三大都市への道 —



池田 誠一

【8】三大都市〈大正後半〉…大正の飛躍

1 大正の名古屋

大正9年、初めての国勢調査が行われました。その結果、名古屋は人口43万人で、東京、大阪、京都に次ぐ、我が国第4の都市であることがはっきりしました。

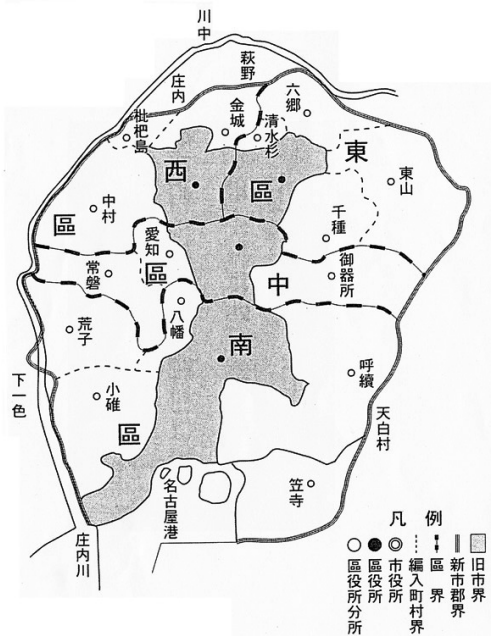


図1 拡大された名古屋市の市域。
面積は4倍近くになっている(文献①)

この時代の名古屋は、鉄道は東海道線・中央線の二大幹線が通り、駅前からは路面電車も走っています。名古屋港も整備が進み、国際貿易が始まっていました。そして陶磁器をはじめ、バイオリンや織機など世界を相手にビジネスを展開する企業も増えていました。もちろん電気・ガス・水道が整備された、全国でもトップクラスの都市に成長していました。

そこで問題となったのが、市域です。当時の市域は、熱田町との合併で南北に長いひびつな形をしていたうえ、6大都市(東京・大阪・京都・名古屋・横浜・神戸)で最低に近い面積だったのです(図1)。

今回は、このように大都市の仲間に認められた名古屋市が、どのような将来像を描いてゆくのか、その経過を追ってみたいと思います。

2 「大名古屋」

(1)大合併

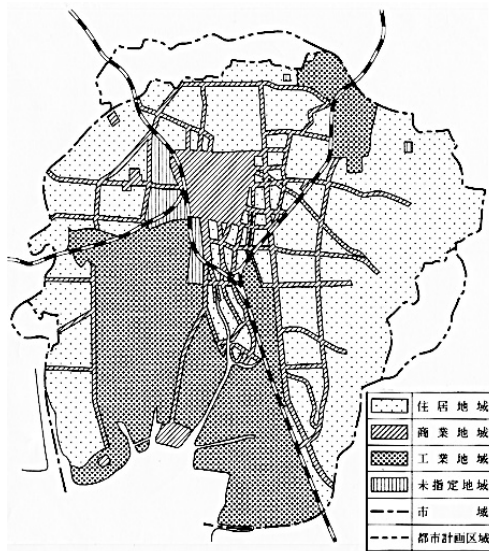
当時6大都市といわれた都市は、すでに相当の市域を持っているところが多く、名古屋

は合併が停滞していたようです。

大正9年、都市計画法が施行になり、法により都市計画名古屋地方委員会ができると、始めの仕事は都市計画区域の設定になります。しかし、市会ではその調整よりもまず合併という議論になったのです。ところが行政区の合併はそう簡単ではありませんでした。

市会で方向を確認した後、9年8月、まず①市は隣接する19町村に合併を要請しました。しかし町村は時期尚早と受け付けませんでした。翌10年になって、②内務省が都市計画区域案を公表したこともあって、7月に協議は再開しました。そこで同月、③県は市に21町村の合併を諮問したのです。④市は議会で協議して、18町村との合併を答申しました。⑤県はその案を内務省に申請しましたが、⑥内務省は町村を審査したうえ、市とも協議し、8月、その内の16町村の合併を許可、指導したのです。その16町村とは、
愛知郡：11町村

千種町、東山村、御器所村、呼続町、小碓村、荒子村、八幡村、愛知町、中村、常磐村、笠寺村



西春日井郡：5町村

枇杷島村、金城村、清水町、杉村、六郷村
…となります。

この編入によって、人口は、愛知郡分15万人、西春日井郡分3万人で、計18万人でした。このため旧市域を加えると62万人となり、あっけなく全国で第三の都市になったのです。また市域は一躍トップでした。

(2)都市計画

都市計画のためには、まず都市計画区域を定めねばなりません。方法として、①30年後の将来人口を推計し、その123万人が住めること。②都心に1時間以内で到達すること等を基準に検討し、行政区でまとめました。その結果、これも様々な議論がありましたが、合併後の市域に5町村（萩野村、庄内村、西枇杷島町、下ノ一色村、天白町大字八事）が加わった区域となりました。

次いで、個別の都市計画が議論されました。第1は「土地利用計画」です。用途地域を住居・商業・工業に区分し、防火地区を設定しました(図2左)。第2は「街路計画」です。街路と

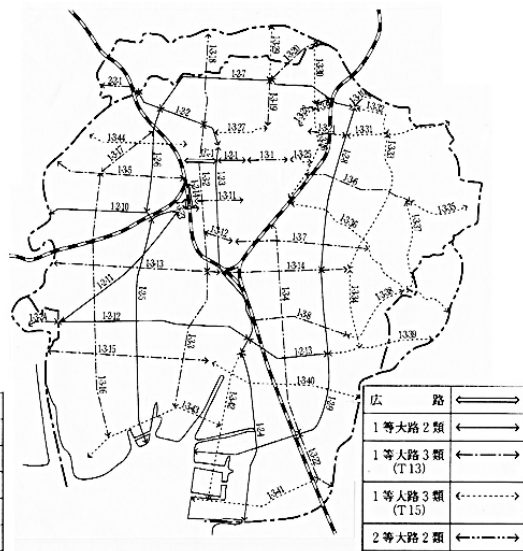


図2 定められた都市計画のうち、土地利用計画と街路計画。
左図では、大きな工業地域が。右図では環状道路が目につく(文献②)

は都市計画でいう道路のことで、幅24間以上の広路から、1等道路、2等道路、各1～3類が決められました(図2右)。これは道路の計画幅員を意味しています。

第3は「運河計画」です。当時は工業化には運河が重要でした。計画した中川、荒子、山崎川、大江川の4運河に堀川を加えて五大運河構想ができました。第4は「公園計画」です。自然・名勝・史跡をはじめ、全体の配置上必要なもの、既設の寺社・公園等から24か所が指定されました。

このほかに第5として「高速度鉄道計画」がありました。これは将来人口130～150万人を想定すると必要になるということでしたが、議論にはなりませんでした。

このようにして、大正13～15年にかけて、名古屋の都市の将来像が出来上がり、事業が進められることになったのです。

(3)都市の変化

それでは、大正時代、街はどう変わったのでしょうか。文化面で驚くのは「映画館」です。14年の調査では、市内になんと41館の劇場・活動写真館があったのです。また住宅もモダンになって、庶民の家屋にも洋館が付け加ったハイカラな住宅が出てきました。

産業面で大きな流れは、今日の名古屋を支えている、豊田系、森村系、あるいは電力、ガス等の企業が育ち始めたことでしょう。また三菱が航空機や電気機器の分野の大きな工場(本社・店)を建設して参入してきたことです。この地方は電気が豊富だったことに加え、都市計画で大きな工業地域が指定されていたからでしょうか。この頃から名古屋は工業都市の色合いを明確にしたようにも思えます。

都市も変わっていきました。11年に、路面電車が市営になりました。また、街でとりわけ注目したいのは大津通の変化です。通り



図3 大正13年、久屋町から上前津の東に移転した新しい商業会議所(文献③)

が北側も拡幅されて北に伸びました。南側には、電力やガスの会社が営業の拠点をつくりました。その南には、栄町角のデパートが新たに7階建ての大きなビルを建てて百貨店「松坂屋」として開業したのです。さらに上前津の東側には、経済活動の拠点である商業会議所が新しい新館を建設しました(図3)。当時名古屋には、街は東南部に伸びていくという認識があったのかもしれませんが。本町通に変わって、大津通は期待通り名古屋の南北軸として成長していくことになりました。

3 紀行 大津通

… 新しい南北軸 …

大正時代の名古屋の都心は、大津通に沿って、栄町から南に延びていきました。今回は、そうして新しい南北軸に成長した大津通を歩いてみます。

〈大津橋から〉

地下鉄の市役所駅南改札を通り、3番出口を出ます。その辺りは昭和の初めまでは陸軍が使用していました。道路ができたのは、昭和8年に市役所ができ、城郭が壊されて大津橋が架けられたときです。

左に進み、その大津橋を渡りまっすぐ進みます。右側に古い建築が二つ、目に付きます。



大津橋から南を見る。昭和8年の市役所開設で城の土塁を壊して道路がつくられた



昭和5年建築の伊勢久(左)と、県の分庁舎

昭和5年頃の建築ですが、この辺りは薬品問屋の街でした。

ビル街の広い通りを進むと桜通です。大正の街路計画で唯一「広路」が指定されたのは、この通りの名古屋駅前です。この通りは、昭和13年にできた県庁から出征兵士が日の丸に送られて駅へと向かう道でした。通りを渡って南に進むと戦後できた錦通を越えて広小路通になります。



桜通との交差点。

ここを兵隊さんが右から左へと曲がっていった

〈上前津へ〉

北に広い幅の桜通ができましたが、広小路通は今も名古屋の東西の中心軸といえるでしょう。明治40年頃は、交差点の東北角には赤レンガの日本銀行支店が、西南角はドーム屋根のデパート・いとう呉服店が建ち、ここが新しい大津通の入口でした。

南に進むと、大正時代、右には電力会社、その先左にはガス会社の営業拠点が建ちました。その南には松坂屋があります。大正14年に建てられた時から改修されていますが、今も当時のイメージが残ります。

その先の百米道路は戦後ですが、東側を見ると坂で下っており、大津通は名古屋台地の東縁に設定されたことがわかります。通りの向こうは大須の街です。大須は、元々西側の本町通が中心でしたが、大正になって東側に拡大し、大津通が入口になりました。大須は、



南大津通。大正時代は、電力会社の拠点など、重要な店が並び始めていた



南大津通を代表する松坂屋。

その向こうに高層になったガスビルが見える



百米道路の東側は、坂で下っている。
大津通は台地の縁の通されたのがわかる

12年に旭郭が中村に移転して落ち込んでいましたが、映画・演劇の街として復活しました。戦前戦後の名古屋を代表する歓楽街です。

その南の交差点が上前津です。東西の通りは広井通といい、東側は明治末の共進会の時に出ました。その後、西側へも延長されて名古屋駅とつながり、駅から大須へのアクセスルートになりました。西南角には昭和6年



大須。赤門通は、大正時代、初の大須南北貫通道路として期待された



上前津交差点の三井住友銀行支店。
名古屋の南の拠点として「三井風」に設計された

に建てられたルネッサンス式の三井住友銀行支店があります。

この交差点から東に坂を下った所、今は中警察になっている所が、13年に建てられた名古屋商業会議所新館の位置になるのです。上前津は東西・南北に地下鉄が走っています。

4 「都市創作」

都市計画行政が軌道に乗った大正の末、全国の大都市の都市計画地方委員会で、機関誌がつくられました。東京は「都市問題」、大阪は「大大坂」、名古屋では14年「都市創作」と名付けられました。

この「都市創作」は、当時未成熟だった都市計画や都市づくりを議論する場になりました。土木・建築というハードな分野と経済・社会というソフトな分野がミックスし、名古屋の都市づくりを先導したのです。

その議論の中心に、その後日本の都市計画の中心人物になった石川栄耀がいました。氏の関心は、どうやって市民が幸せになる都市を実現するかがテーマです。そのための実現手法である区画整理の推進や都市計画にはない「盛り場」論など、実際の現場にも入って、名古屋の都市づくりに多くの影響を与えました。当時の名古屋は、すでに都市づくりの最先端都市だったといえるのかもしれませんが。

ところが、このような議論の場だったユニークな名古屋の研究誌「都市創作」は、昭和5年、残念ながら全国誌「都市公論」への統合によって消えていったのです。

〈主な参考文献〉

- ①同編集委員会『新修名古屋市史⑥』（2000、名古屋市）
- ②同編集委員会『名古屋都市計画史』（1999、名古屋都市センター）
- ③服部鉦太郎『大正の名古屋』（1980、泰文堂）